

安心して過ごせる校内別室への取組について

不登校生徒の状況

対象生徒はこだわりが強く、意に反することを拒絶する面が見られた。また、周囲とのコミュニケーションを取ることに課題が見られた。4月当初は登校を拒み、校舎内に入ることができない日もあったが、6月に入り校内別室に居場所ができ、徐々に登校が安定した。自己表現の場を意図的につくり、自己決定の場を選定している。

具体的な取組

○一人1台端末の活用

校内別室では、一人1台端末を活用した学習により、生徒自ら計画した学習により、ニーズに応じた学習支援につなげた。また、校舎の形状を活用し、他の生徒との接触を避ける工夫をしたことで、自分に合ったペースで安心して学習や生活ができる環境につながった。

当該生徒の実情を踏まえ、コミュニケーション能力や言語活動の育成を、ゲーム等を用いて取り組んだ。



○学習満足度調査の活用

学習満足度調査を年2回実施し、取組課題を各学年で検討した。

生徒同士の人間関係づくりのためにグループエンカウンターやアサーショントレーニングに取り組み、楽しみながら互いを認め合い、個々を受け入れることができる魅力ある学級づくりを推進し、未然防止に取り組んだ。

○当該生徒についての情報共有

当該生徒についての情報共有を図り、SCや不登校対応巡回教員を含めたアセスメントによる支援を進めるため、不登校生徒の支援会議の一環として週1回の特別支援校内委員会を位置付けた。また、会議の結果を全教員に周知するようになった。

○SC、SSWとの連携

長期化している生徒に対して、SCやSSW、教育支援センターと連携し、登校復帰に向けた別室登校を行った。

成果

校内別室の利用者が徐々に増加し、1日に7人の生徒が登校することもあった。不登校出現率が到達指標を上回ったものの、新規不登校出現率は到達指標を0.33ポイント下回った。

課題

不登校生徒にとって、人と関わる力や人間関係の育成を図ることの必要性について、全教員の理解を深め、授業づくりの改善を図ること。

自己存在感を高める校内別室の取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校4年生から人前での発言や発表に極度の緊張や不安をもつようになり、体調不良で休みがちになった。中学校1年生の6月頃から断続的な欠席が見られ、教育支援センターに通室していた。2年生に進級後、校内別室に登校し、学習するようになった。他者と関わる力を高めることが課題である。

具体的な取組

○校内別室における支援

「授業が分からず、教室に居づらい」「学校に行きにくい」と感じている生徒に校内別室の利用を勧め、自分に合ったペースで安心して学習や生活ができる環境づくりに努めた。特別な入口と非常階段を活用し他の生徒との接触を避けられるようにした。ゲーム等を用いてコミュニケーション能力や言語活動の育成に取り組んでいる。



○一人1台端末の活用

一人1台端末を活用した個人学習により、当該生徒のニーズに応じた学習プランを自ら計画し取り組むようにした。

また、授業配信を校内別室で視聴できるようにし、授業者や学級の生徒との通話により、自己存在感が高まるようにしている。併せて、プリントなどの配布資料を整えた学習環境を整備した。

○学級担任との関わり

学級担任が校内別室を訪れ、登校した生徒と毎回会話をし、学校行事を含めた日々の連絡や次回の登校など、当該生徒の意向を確認した。学級担任とのふれあいにより自己有用感が高まるようにしている。

○不登校生徒について情報共有

週1回実施している特別支援校内委員会を支援会議の一環として組み入れた。不登校生徒について、学年の担当者の報告により、情報を共有し、SCや不登校対応巡回教員を含めたアセスメントによる支援を行えるようにした。会議後には結果を全教員に周知している。

成果

校内別室の支援内容にコミュニケーション能力の育成と学習支援を組み入れ、家庭から校内別室へ、校内別室から教室へとつながる活動を展開した結果、昨年度より新規不登校出現率が2.91ポイント、不登校出現率1.73ポイント減少した。

課題

人間関係づくりのためのトレーニングを取り入れることの意義を各学級で実施することが課題である。

家庭訪問、ポストイン、メール連絡等による生徒との信頼関係の構築

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校 5 年生から不登校となり、中学校に入学してからも 4 月当初は登校できたが、次第に欠席が多くなり、5 月の連休明けから不登校となった。話の最中に目線を合わせられないなど、繊細な面があるが、学校を休んでいる間も自宅で学習し、得意な科目は定期試験で高得点を取った。

具体的な取組

○家庭、担任と情報連携による家庭訪問
家庭への連絡は、学校パソコンのメールを使い取り合い、こまめにメールをチェックし、保護者からの要望等には、迅速かつ丁寧に学年教員から返信するようにした。週 1 回定期的に、巡回教員が担任と当該生徒の支援方法について打ち合わせをした後、担任からのメッセージを添付した授業プリントや便り等を届けに家庭訪問やポストインを行った。

また、校内別室ができたことを話題にし、興味をもって登校しやすいようにした。



○校内委員会による連携強化と校内研修
チーム支援のために特別支援委員会を隔週で開催し、当該生徒の現状把握や指導内容を検討し、生徒との関わり方において、不登校担当教員や学年担当教諭、養護教諭等が共通した対応ができるよう調整した。また、研修キットを活用してミニ校内研修を行った。会議の情報資料は学年回覧、研修資料は校務支援システムにて掲示して全教員で共有し、校内における支援協力体制を強化した。

○関係機関との連携による登校支援
SC や SSW、教育センター支援員と連携し、担任同行の家庭訪問や校内別室への促し等、登校復帰に向けた支援を行った。

○校門登校や別室登校等の出迎え誘導
当該生徒が朝 9 時に、校門・昇降口や職員室、校内別室等に登校できるように、不登校巡回教員が校門や昇降口にて出迎え、職員室や校内別室へ誘導した。登校後の学校滞在予定を当該生徒が決めるようにして、無理のない登校につなげた。

成果

学校との信頼関係が徐々に深まり、2 学期から不登校巡回教員の出迎えによる校門登校や職員室への担任登校、支援員による自習室利用等の登校ができる機会が多くなった。

課題

継続的に「家庭訪問」等を通して生徒及び家庭との信頼関係を高め、自習室登校や外部機関の支援等につなげていく。

校内連携、全校体制による校内別室（自習室）の活用

不登校生徒の状況

対象生徒は、こだわりが強い部分があり、課題が終わっていないと登校を渋ることがあった。その後、中学校 2 年生の 1 学期後半から欠席が目立つようになり、不登校となった。しかし、夏季休業明け 2 学期からは、校内別室に登校し始めた。

具体的な取組

○校内委員会による組織力の向上

チーム支援のための校内委員会を週 1 回開催し、当該生徒の現状把握や指導内容を検討し、生徒との関わり方において、学年担当教諭や養護教諭等が共通した対応ができるよう調整した。

校務支援システムを通して、情報を全教員に共有し、校内における支援協力体制を構築した。

○校内別室の活用

自学自習を基本として取り組む教科は、生徒が自ら考えるようにし、生徒の希望に沿って、支援員が個別の学習支援を行った。

生徒の実態に応じた支援員作成の漢字の問題に取り組めるようにした。



○個別学習、リフレッシュタイムの充実

一人 1 台端末を活用した学習アプリ課題や調べ学習、教科担当が出す課題、生徒が持参した課題等、生徒の状況に応じた課題に取り組めるようにした。

自学自習で疲れたときや学習意欲が下がったときに、読書、パズル、折り紙、手芸、カードゲームなどをして過ごせるようにした。

○学級担任、学年教科担当教員との連携

担任や教科担当教員が空き時間に別室に訪れるようにし、コミュニケーションを取ることで当該生徒とのつながりが途絶えないようにした。

個別ファイル（学習記録）により、支援員と担任が連携を取り、当該生徒の情報を共有できるようにした。

成果

体調不良等で欠席することはあったが、校内別室登校開始後は、決まった時間に毎日登校ができるようになり、参加できそうな教科の授業を教室で受けたり、別室活動以外の時間に「行事に関する事前学習」や「学級活動」の時間に参加したりすることができるようになった。

課題

オンライン授業や一人 1 台端末を活用した学習支援を校内別室に導入し、通常授業の個別支援の充実を図り、全教職員や専門職が見守る支援体制を構築する。

放課後学習教室、校内別室（自習室）を活用した登校支援

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 2 年生の 2 学期後半から欠席が目立つようになり、3 学期には欠席が長期化して、不登校となった。提出物や宿題、持ち物の管理、授業への取組に課題が見られ、授業中も集中していない時があった。

具体的な取組

○校内別室の開設、利用時間の拡大

登校しやすい環境、居場所の確保として、今年度より新たにパソコン教室及びパソコン準備室に校内別室を整備した。支援員が週 4 日放課後学習の支援を行うとともに、午後に授業の別室支援に当たり、個別に学習支援を行う校内体制を構築した。

不登校担当巡回教員の巡回日には、午前中から校内別室の支援に当たり、巡回日は、いつでも利用できるようにした。



○校内委員会による連携強化

チーム支援のために教育相談部会を週 1 回開催し、支援シートを基に生徒の状況や変化を共有し、生徒との関わり方において、不登校担当教員や学年担当教諭、養護教諭等が共通した対応ができるよう調整した。会議の情報資料を学年ごとに回覧し、全教員で共有し、校内における支援協力体制を強化した。

○生徒意識調査による「居場所づくり」「絆づくり」の推進

生徒意識調査を各学期に 1 回実施し、調査結果を分析して全教職員周知し、「不登校が生じない魅力ある学校づくり」に向けた組織的な教育活動や「居場所づくり」「絆づくり」の推進を図った。また、否定的回答をした生徒へのアプローチや個別のケア等の未然防止にも活用した。

○関係機関との連携による登校支援

SC や SSW、学習適応教室と連携し、放課後学習教室や校内別室への参加等、登校復帰に向けた支援を行った。

成果

当該生徒は、3 年生 5 月からは支援員による放課後学習教室への参加や別室登校ができるようになった。2 学期からは朝から登校し、教室にも復帰することができるようになり、疲れた時だけ校内別室を利用するようになった。

課題

引き続き、放課後学習教室への参加や校内別室の利用時間の延長を促し、全教職員が見守る個別支援体制を構築していく。

生徒同士の関わり合いを通した未然防止の取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は授業内容の理解につまずき、何事も後回しにする性格も影響し、生活が乱れ始めた。このことがきっかけとなり、中学校 2 年生 2 学期頃から家庭の自室に引きこもるようになった。3 年生 9 月に巡回教員が家庭訪問を繰り返し、徐々に生活習慣の改善が進み、日常生活にも活力が見受けられている。

具体的な取組

本校では、令和 2 年度より学校満足度調査を実施し、取組課題を各学年で検討している。

さらに、定期的に人間関係づくりを目的にしたゲームに取り組み、生徒同士が関わり合う場面を意識的に設定し、楽しみながら互いを認め合い、個々を受け入れることができる魅力ある学級づくりを推進する。

また、不登校生徒の支援のために T T で授業支援に当たり、学習や作業に遅れがちな生徒の支援を行い、不登校の未然防止に努める。

長期化している生徒に対して、家庭訪問を繰り返し、保護者と当該生徒との面談から「人と関わる力」を身に付け、社会的な自立に向けた支援を行う。

週 1 回実施している教育相談委員会を支援会議の一環として組み入れる。不登校生徒については、当該学年の担当教員から報告をして、S C や不登校対応巡回教員を含めたアセスメントにより支援を始める。支援会議後には会議の内容を全教員に周知し、統一した支援を行う。

4 月に校内別室を開設した。「授業が分からず、教室に居づらい」「学校に行きにくい」と感じ始めた生徒に利用を勧め、自分に合ったペースで学習や生活ができる環境を提示する。一人 1 台端末を活用した個人学習アプリにより当該生徒のニーズに応じた学習プランを自ら計画し、取り組めるようにする。



成果

不登校生徒数は 4 人減少した。不登校出現率は、昨年度より 1.43 ポイント減少し、達成指標を 3.19 ポイント下回った。新規不登校出現率も 0.77 ポイント減少し、到達指標を 1.68 ポイント下回った。

課題

計画的にコミュニケーション能力を育成する授業を取り入れるなど、不登校生徒に対する対応への理解について、共通理解を図ることが課題である。